

PE 02

中学生にとっての総合学習の意義-学業自己概念に注目して-

角谷詩織

(お茶の水女子大学)

無藤 隆

(お茶の水女子大学)

問題と目的

中学校への移行は重大なイベントであるが、子どもにとって中学校への適応は難しいものとなっている。中学生の発達を促すような環境とは、生徒の自律性・主体性を生かす環境である (e.g. Eccles & Midgley, 1998)。近年では、総合学習の時間を設け、生徒の自律的、主体的活動により「生きる力」を育もうとされている。

本研究では、総合学習が中学生の適応感とどのように関連をもつかということを検討する。中学校では、高校受験が現実的なものとなるに伴い、周囲からの学業面での期待が急激に大きくなる (落合ら, 1995) ため、学業成績は大きな問題であり、それによって学校に対する感情や自分に対する自信などが大きく左右されるだろう。そこで、本研究では、学業自己概念の高低に注目して総合学習の意義を検討する。

方法

中学 1～3 年生 (計 1020 名) を対象に 1999 年 7 月、質問紙調査を実施した。

分析を行った質問内容：中学生の適応感、総合学習への取り組み、総合学習への思いに関する項目。
回答形式：6 段階尺度で回答した。

結果と考察

項目の合成 主因子法、バリマックス回転による
表1. 学業自己概念別合成変数得点(項目数)

	L群	M群	H群
スポーツ自己概念(5)	3.18	3.79	4.14
学業自己概念(5)	1.98	3.40	4.97
社会的自己概念(5)	3.94	4.44	4.75
興味の広がり(4)	4.02	4.35	4.74
学習観(5)	3.49	4.02	4.53
学校生活への満足度(4)	3.98	4.51	4.69
充実感・自信(5)	3.17	3.90	4.41
主体性・自律性(6)	3.23	3.80	4.04
積極性・目標志向性(5)	3.46	3.74	3.74
挑戦・達成(6)	3.45	4.02	4.28
ポジティブな評価(7)	3.49	3.85	3.88
他者評価を意識しない取り組み(2)	4.18	4.05	4.03

因子分析を行った結果、表 1.にある合成変数が得られた。なお、変数は得点が高いほどポジティブであるようにした。

学業自己概念の高さによる比較 学業自己概念の低い生徒、普通の生徒、高い生徒 (L 群, M 群, H 群) 別の合成得点を表 1.に記す。学業自己概念の高い生徒はどの要因の得点も高く、学業自己概念の低

い生徒はどの要因の得点も低い。そして、その差は、H 群と M 群間よりも M 群と L 群間のほうが大きい。しかし、L 群は全体的適応感の要因に対して総合学習での要因の得点が比較的高く、学業自己概念が低い生徒でも、総合学習活動においては、ポジティブな感情を抱いていると思われる。

総合学習と適応感との関わり L 群の総合学習における 5 つの要因と適応感間の相関を表 1 に記す。総合学習における 4 要因と適応感との関連がみられた。また、その相関は L 群よりも H 群の方が高く、M 群はその中間を示す傾向にある。

L 群は社会的自己概念、学校生活への満足度、充実感・自信との関連が興味の広がり、学習観、との関連よりも強い傾向をもち、総合学習と適応感との関連において特異性を持っていることが推測される。特に、L 群において、学習観との関連が弱いことは、学習観と学業自己概念との関連が比較的高いこととも合わせて、L 群の学習観が教科学習と強く結びついていることが推測される。

表2. L群における合成変数間相関

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
①スポーツ自己概念												
②学業自己概念	.17											
③社会的自己概念	.47	.20										
④興味の広がり	.12	.02	.14									
⑤学習観	.15	.27	.08	.16								
⑥学校生活への満足度	.29	.24	.39	.00	.37							
⑦充実感・自信	.52	.28	.55	.18	.20	.56						
⑧主体性・自律性	.29	.24	.40	.33	.16	.21	.38					
⑨積極性・目標志向性	.15	.12	.19	.14	.37	.40	.19	.36				
⑩挑戦・達成	.33	.15	.37	.35	.20	.33	.41	.68	.58			
⑪ポジティブな評価	.09	.21	.21	.16	.36	.39	.22	.33	.71	.65		
⑫他者評価を意識しない取り組み	-.17	-.13	-.17	.03	-.06	-.11	-.04	-.01	-.04	-.03	-.06	

考察

適応感や自己概念間の関連から、L 群において、「興味の広がり」が他の要因と関連をもたず、学業自己概念と学習観や学校生活への満足度が独自に関連をもつという特徴をもち、勉強が不得意だと感じている生徒ほど勉強の得意不得意の影響をダイレクトに受けやすいということが推測される。勉強が不得意な生徒でも、総合学習では比較的元気に活動している可能性があるため、その活動の意義をいかに広げることが大きな課題となるように思われる。例えば、興味の広がりや学習観を総合学習を通して結びつけることによって、教科学習へのとらわれが低くなり、学校生活が楽しくなるかもしれない。